

令和 2 年 7 月 10 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16H03502

研究課題名（和文）西洋近代の海洋世界と「海民」のグローバル循環 北大西洋海域から

研究課題名（英文）Global Circulation of Seafaring People in the 18th and 19th centuries

研究代表者

田中 きく代 (Kikuyo, Tanaka)

関西学院大学・特定プロジェクト研究センター・客員研究員

研究者番号：80207084

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 14,570,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、西洋近代における海の歴史的役割を、海民（海に生きる様々な人々）の世界的移動による海域の接合に探り、従来の陸地中心の歴史学を批判するものである。この海のグローバル化の全体像を探るには、従来の経済的な次元での「商品」フローを追求するのではなく、海の連結に直に貢献した人間としての海民を多面的に分析することが重要となる。そこで、本研究では海民の世界を日常から「知」の領域まで層序を掘り下げていくこと、すなわち海民の移動範囲やライフサイクルあるいはマンタリテの次元と、交易や移民のネットワーク、海洋資源を求める国家政策の次元と、海の記憶や語りの次元とを重層的に立体化し総合化を図ることになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

海の歴史は、「中核」の覇権的な国家ではなく、国家や民族といった枠組みに捉われない「周辺」の地域に目配りする歴史である。海民、すなわち海に生きる様々な人々の歴史は、従来の陸の歴史に比較して流動的で、可変的で、移動性がある。陸の歴史に海の歴史を架橋することで、過去の全体像を再構成することができるという学術的意義がある。また、人種・エスニシティ、ジェンダー、階級、家族などの現在の社会問題を生んでいる要素を考えると、海の社会は偏見や差別の少ないものである。社会の多様性や人々の独自性を許容するものである。海の歴史を提示することで、現在の社会問題を打開する共生の道を示唆するという社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This project aims to inquire into the world of the seafaring persons in the 18th and 19th centuries. They were the persons who lived their lives related to the sea and moved around the world by ship and changed human activities and lives in the oceans. This global circulations of them tells us about a different history from our conventional historical view based on continental history, so to speak terra centrist history. Their history suggests us comparatively more fluid and diversified societies. By challenging the widely believed historical views and proposing new views based on oceanic history, we found unique examples of various seafaring persons in all levels.

研究分野：アメリカ合衆国史

キーワード：海民 海のリテラシー グローバル循環 大西洋海域 太平洋海域 地中海海域 文化共同体 テキスト

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始するにあたって、二つの学問的潮流に刺激を受けたことがあった。

第一は、B.ペイリンの *Atlantic History*、T.ファローラらの *Atlantic World*、B.クレインらの *Sea Changes*、M.レディカーらの *The Many-Headed Hydra*、A.カバントウの *La mer et les hommes* など一連の研究に影響を受けて、海からの射程の歴史研究が、内外で数多く生み出されるようになっていたことがある。研究代表者ならびに研究分担者も、「陸からの歴史」を超えるパラダイムの転換に触発され、北大西洋海域でアトランティック・ヒストリーを描く研究を続けてきた。

ことにG.ル・ブエデクの主張する「multi-activité 海民の多面的活動」を重視し、海民を漁民や船乗りに限定するのではなく、半農半漁の人たち、船主、貿易商人、海軍兵士、海賊など、「広く海に生きる人々」と考えてきた。こうした海民の多面的活動についての共通理解は、田中・阿河編『道』と境界域 森と海の社会史』(昭和堂)、田中他編『境界域から見る西洋世界』(ミネルヴァ書房)に活かされている。また、2014年の西洋史学会では、「海のリテラシー (情報を取得し、理解し、活用する能力)」について、シンポジウムを行った。この内容は、さらに洗練し『海のリテラシー 北大西洋海域の「海民」の世界史』(創元社、2016)として上梓した。また、分担者の金澤周作は『海のイギリス史』(昭和堂)を編んで、イギリス史から見た海の世界の可能性を描いている。

第二に、関係史の潮流の刺激を受けて、海民の多面的活動を、特定の海域に限定するだけでは限界があるという共通理解があったため、他の海域に接続することが必要であると考へた。海洋でのグローバルな循環の複線的なメカニズムは、複数の海域を接合させてのみ、その特質やダイナミズムを把握することができる。そこで、海民の文化的次元での活動や生活を、表層の「日常生活」の循環レベルから「海の『知』」の循環レベルまで、諸層を掘り進み、その重層的な諸関係を探ることで、人間としての海民の世界的な循環プロセスを検証すべきだと考へるようになった。

もっとも、海民のグローバルな循環ということでは、国際経済史やグローバル・ヒストリーにおいて、奴隷や移民などのマンパワーを「商品」として扱い、その循環を量として検証する多くの研究がなされてきた。しかし、E.モラウスカが“playing within structures”の概念で主張するように、構造的制約の中で揺れ動きながらも強靱な独自性を発する人間の文化的・認知的なものが重視される。海洋の世界の歴史も、舵や帆をあやつり、罎を焚き、海図を読み、魚や鯨をとり、奴隷を輸送し、旅客の世話をし、船を襲い、大砲を撃つ、海民の日常の諸所に、その独自の「選択」という主体性があるという実感を覚えるに至って本共同研究が開始された。

2. 研究の目的

西洋近代は世界の海の風景を一変させた。ヨーロッパ諸国が外洋に乗り出し、アフリカ、アジア、両アメリカの地域と接合するにつれ、様々な海民が未曾有の規模で行き交うようになった。本研究は、近代欧米の海民が果たした歴史的役割を究明し、陸の歴史からのパラダイムの転換をはかるものである。

ただ、この海のグローバル化は、従来の経済的な次元での、「商品」フローを追求する研究では全体像を把握できない。それで、海^の連結に直に貢献した、人間としての海民に射程を当て、彼ら彼女らを多面的に分析する。そのために、本研究は、海民の世界を、日常から「知」の領域まで、すなわち海民の移動範囲やライフサイクルあるいはマンタリテの次元、交易や移民のネットワークや海洋資源を求め^る国家政策の次元、海^の記憶や語りの次元へと層序を掘り下げていき、海民を中心としながら、多様な彼ら彼女らの世界を重層的に立体化して、全体像を捉えることことを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、世界の海の一体化を、海民に焦点をあて、その人間としての循環を通して考察するものであるが、北大西洋海域のアトランティック・ヒストリーの方法や成果を踏まえた、歴史学の立場からの学際的実証研究である。その際、海民の循環の文化的次元の重層性に注目する。その諸相は相互に関係を持ち、何層にも重なっているので、ここでは、便宜的に3つの層、「日常生活レベルの循環」、「交易や覇権のネットワークのレベルの循環」、「海^の『知』のレベルの循環」に分類し、役割分担もそれに対応させた。もっとも諸層間の関係、その媒介項が重視されるので、班毎の研究と共に、全体での相互理解に留意した。

また、理論面あるいは方法論での分担を担う歴史学や文化人類学の研究者や、海^の語りなどを読み解く方法を説く文学などの研究者からも連携研究者あるいは協力研究者として支援をあおいだ。研究の構成員は、海に関する関心もまた、海洋史、海事史、国際交易史、移民史など多様であり、一様ではない海の世界を描くのに必要な陣容である。

以下研究班ごとに分けて、具体的に説明する

1) 「海民の生活」循環班

海民がそれぞれの持ち場でどのような人生の軌跡を描いたのか、厳しい環境で、自らの生をどのように守ったのか。それが周辺の人々や地域にどのような影響を与えたのか。

次の世代にどのように受け継がれたのか。小さな港村のレベルでの住民を対象とするデモグラフィ研究や、あるいは、船長、貿易商人、漁民、プランターのモノグラフィ研究によって、海民の循環の可変性・流動性・移動性について検証した。海民は陸の近代世界と違って、前近代の「われら失いし世界」に近い面がある。漁民が商人になったり、農業をしたりと可変的で、1年のうちでも季節ごとに流動する。また、捕鯨やタラ漁の遠洋漁業者、遠距離の貿易商人、海軍兵士などといった遠洋航海者には、世界を廻り数年の歳月を海で暮らす、その船上での生活、母港で暮らす家族を取り込む世界がある。さらに、彼らの生死の問題は、マンタリテの領域開拓にも新たな可能性を示唆する。

2) 「交易の世界・海洋の覇権」レベルの循環班

第1に、国際的な交易に携わる人々のネットワークのメカニズムはいかなるものであったのか。その結節点である船や港湾で、船会社、船長、船乗り、貿易商人、エージェントといった海民はどのような役割を果たしたのか。物品やマンパワー（移民や奴隷）の輸出ネットワーク、輸入ネットワーク、途上での連結ネットワークを、それぞれを支える海民とその社会的結合関係を具体化し、それらがネットワーク上を移動する様相を明示する。第2に、欧米諸国が海洋覇権を確立し、ヘゲモニーを持続するために、海を領有し、海民を利用したことがある。海洋資源を発見・確保する、軍事的・戦略的な物資と、魚類・農産物・工業原料の供給システムに、海民は組み込まれたのである。

3) 「海の『知』の循環班」

手ごわい海をどのように人間のために飼いならすか。そのための情報をいかに取得し利用するか。また、いかにして、そうした情報をより広い空間で共有するのか。海民の記憶や語り、ほら話、冒険譚を介する情報から、国際外交や国際法の取り決めまで、情報はどのように伝わるのか。それによって、どのようなシステムが作られていくのか。海の情報の様々な拡散の有り様を検証した。また、海の航行の技術革新や自然的な要素の強い海域、海流（潮流）、海港、島嶼部といった情報から、新たに発見された世界の珍しい植物や動物の情報の共有・交換にいたるまで、海で運ばれる情報（たとえば物流、知識の交流、交信、漂流）などにも関心を広げた。

4. 研究成果

研究代表者、研究分担者、研究協力者の個別の研究並びに共同研究により、上記の研究が中間段階ではあるが、ある程度の段階まで進み、紙媒体による報告書を刊行する準備をしている。また、来年度には、本として公開する準備も進めている。海外からの招聘では、2回のシンポジウム（インド洋、太平洋と、大西洋の接続 俯瞰的な海洋史による海の多様性）と、2回の講演（映画に現れた海洋 改革運動の起源としての海）を実施することができたが、それらを通して、様々な海域の接続と、より総合的に海洋文化を捉えることで刺激を受けた。また、メディアと海、海民の思想や活動の広がりに関して知見を得た。また、国内からの研究者の招聘によって、研究分担者・研究協力者の枠を超えて海の研究のネットワークを広げたことにある。ことに、ハワイ、東アフリカなど太平洋やインド洋を繋ぐ研究のための研究を通して、海の多様性ととも、共時性のようなものを探ることができた。また、報告者以外にも、海洋研究の研究者が積極的に参加され、方々の諸見解にも示唆を受けることが多かった。さらに、海外調査報告の時間を多くとったことも特筆できる。研究代表者・分担者が海外調査の概要を紹介することで、捕鯨、奴隷貿易、海軍、海賊・私掠など、様々な海民に関する知識と有効な調査史料について、本研究の構成員全員が共有するものとなった。

以下、研究代表者、研究分担者による個別の研究成果を具体的に記している。

2016年度（図書）

田中きく代、阿河雄二郎、金澤周作編著『海のリテラシー 北大西洋海域の「海民」の世界史』（創元社、2016年）総320頁

（口頭発表）

Koji Takenaka, "Opening Remarks, Japanese Scholarship in African American Studies, 1944-2011", The University of California Education Abroad Program, Summer Session of the Workshop (国際学会), Osaka University, August 1, 2016

2017年度（論文）

田中きく代「北大西洋海域史から見るアポリシヨニズム研究への射程 西インドにおける奴隷解放の祝祭8月1日祭を中心に」『人文論究』67-3巻(2017年)(関西学院大学) 31-48頁

遠藤泰生「反米：あらたな紛争の胎動か、共生の代償か(序)」ODYSSEUS(東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻1)』22号(2018年)105-120頁

（図書）

- 阿河雄二郎・嶋中博章『フランス王妃列伝』(昭和堂、2017年)総305頁
- 笠井俊和『船乗りがつなぐ大西洋世界 英領植民地ボストンの船員と貿易の社会史』(晃洋書房、2017年)総318頁
- 君塚弘恭、玉木俊明・川分圭子編著『商業と異文化の接触』(吉田書店、2017年)総897頁
- 君塚弘恭訳(ジェラルド・ル・ブエデク)大豆生田 稔編著『軍港都市史研究 7 国内・海外軍港編』(清文堂出版、2017年)総344頁
- (口頭発表)
- 田中きく代「環大西洋世界の思想・宗教・歴史 北大西洋海域史を問う、黒人奴隷解放の祝祭を中心に」(日本アメリカ学会、2017年)
- 遠藤泰生、コメンテーター“Looking at the Present from the Past: The Transformation of Political Culture in the United States”
- (アメリカ太平洋地域研究センターシンポジウム(国際学会)、2017年)
- 遠藤泰生、司会、“Transportation and Time Zones”. Pacific Gateways: International Symposium on English Literature and the Pacific Ocean, 1760-1914, (Department of English, University of Tokyo(国際学会),2017年)
- 金澤周作「ロビンソン・クルーソーたちの帰還 17~19世紀における難船者の運命」(日本ジョンソン協会、2017年)
- 中野博文・肥後本芳男「言論空間から見るアメリカ史 奴隷制問題をめぐる印刷文化と連邦体制」(日本アメリカ史学会、2017年)
- 2018年度(論文)
- 阿河雄二郎「カナダ征服戦争の顛末とその意味」『アジア太平洋論叢』(アジア太平洋研究会・大阪大学)(2019年)21号、3 25頁
- 遠藤泰生「海から見るアメリカ史の可能性と課題: 笠井俊和『船乗りがつなぐ大西洋貿易 英領植民地ボストンの船員と貿易の社会史』(晃洋書房、2017)を読む」『アメリカ太平洋研究』19号(2019年)87-96頁
- 君塚弘恭(G. Le Bouedec et H. Kimizuka)“Lorient, grand port de dimension mondiale de la facade atlantique francaise (1783-1787)?,” *Annales de Bretagne et des pays de l'Ouest*, 126 (2018), 103-125
- 坂本優一郎「書評 笠井俊和著『船乗りがつなぐ大西洋世界: 英領植民地ボストンの船員と貿易の社会史』」『西洋史学』266号(2018年)94-95頁
- 佐保吉一「旧デンマーク領西インド諸島におけるフリーカラードFree Coloredに関する一考察 - 聖クロイースSt. Croixを中心に - (1733-1848年)」『IDUN - 北欧研究 - 』(大阪大学)23号(2019年)281-296頁
- 田和正孝「明治期における兵庫瀬戸内の延縄漁業 『兵庫県慣行録』の記載 『人文論究』(関西学院大学)68巻第2号(2018年)1-30頁
- 肥後本芳男『ジャクソン期のアポリシヨニズムと印刷文化 言論・0版の自由と請願権をめぐって分裂する公共圏』『アメリカ史研究』41号(2018年)4-20
- (図書)
- 田和正孝『石干見の文化史』(昭和堂、2019年)総288頁
- (口頭発表)
- 田中きく代「海のリテラシー 北大西洋海域から」(中四国アメリカ学会第40回年次大会、2018年)
- 遠藤泰生「海・ネイション・科学 19世紀の太平洋を考える」(ワークショップ.海をめぐる知識・言説・移動空間(環太平洋地域史の新展開)、2018年)
- 遠藤泰生“Comment: "Activism and American Society" (日本アメリカ学会第52回年次大会、2018年)
- 田和正孝「地域漁業学会と漁業地理学」(地域漁業学会第60回大会、2018年)
- 田和正孝「兵庫瀬戸内における漁業の維持機能 漁業者・系統団体・研究機関・行政」(日本地理学会春季学術大会、2019年)
- 中野博文「帝国主義と国際主義の狭間で--東部知識人が抱いた文明観の転換」(部会B「20

世紀アメリカの諸思想」(日本アメリカ学会第52回年次大会、2018年)

2019年度(論文)

田中きく代「19世紀中葉のアメリカ合衆国におけるドイツ系移民再考 フォーティエイト
ーズとターナーズを中心に」『アメリカ研究』53号(2019年)59-72頁

金澤周作「もうひとつの奴隷貿易 近世地中海における虜囚と身代金」『西洋史学』267
号(2019年)50-70頁

金澤周作「パックス・ブリタニカ前夜の西地中海 マグレブ・虜囚/奴隷・大西洋」『関
学西洋史論集』43号(2020年3月)29-37頁

君塚弘恭(et Gérard LE BOUËDEC,)“Lorient, grand port de dimension mondiale
de la façade atlantique française (1783-1787)?” *Annales de Bretagne et
des Pays de l'Ouest*, 126-1, (2019), pp. 103-125

佐保吉一「静岡・デンマーク牧場におけるデンマーク人農業指導者エミール・フェンガ
ーの足跡 - 青砥好夫氏へのインタビューを中心に -」『東海大学紀要文化社会学
部』第2号(2019年)35-52頁

(図書)

阿河雄二郎「近世フランスと《外》の世界」平野千果子(編)『新しく学ぶフランス史』
ミネルヴァ書房、2019年11月刊、37-61頁

金澤周作「見えざる他者から照らす コリー『虜囚 1600 1850年のイギリス、帝国、
そして世界』」藤原辰史編『歴史書の愉悦』(ナカニシヤ出版、2019年)53-62頁

(口頭発表)

Hiroyasu KIMIZUKA "Coastal shipping and admiralties of French colonies in the
eighteenth century", Conference 2019 Transport, Traffic and Mobility,
International Association for the History of Transport, Traffic and
Mobility, August 18, 2019

中野博文「アラバマ号事件再考 仲裁裁判制度の発展とアメリカ合衆国の帝国主義
政策との連環」(第69回日本西洋史学会年次大会自由論題(2019年、静岡大学))

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 15件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 14件）

1. 著者名 田中きく代	4. 巻 53
2. 論文標題 19世紀中葉のアメリカ合衆国におけるドイツ系移民再考 フォーティエーターズとターナーズを中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『アメリカ研究』	6. 最初と最後の頁 59-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 金澤周作	4. 巻 267
2. 論文標題 もうひとつの奴隷貿易 近世地中海における虜囚と身代金	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『西洋史学』	6. 最初と最後の頁 50 - 70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 金澤周作	4. 巻 43
2. 論文標題 パックス・ブリタニカ前夜の西地中海 マグレブ・虜囚/奴隷・大西洋」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『関学西洋史論集』	6. 最初と最後の頁 29 - 37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 阿河雄二郎	4. 巻 21
2. 論文標題 カナダ征服戦争の顛末とその意味	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『アジア太平洋論叢』（アジア太平洋研究会・大阪大学）	6. 最初と最後の頁 3 25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 遠藤泰生	4. 巻 19
2. 論文標題 海から見るアメリカ史の可能性と課題：笠井俊和『船乗りがつかなく大西洋貿易 英領植民地ボストンの船員と貿易の社会史』（晃洋書房、2017）を読む	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『アメリカ太平洋研究』	6. 最初と最後の頁 87-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 坂本優一郎	4. 巻 265
2. 論文標題 古典再読 工業化とジェントルマン：川北稔『工業化の歴史的前提：帝国とジェントルマン』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『西洋史学』	6. 最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 坂本優一郎	4. 巻 266
2. 論文標題 書評 笠井俊和著『船乗りがつかなく大西洋世界：英領植民地ボストンの船員と貿易の社会史』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『西洋史学』	6. 最初と最後の頁 94-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐保吉一	4. 巻 23
2. 論文標題 旧デンマーク領西インド諸島におけるフリーカラードFree Coloredに 関する一考察 - 聖クロイース St. Croixを中心に(1733-1848年) -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『IDUN - 北欧研究 - (大阪大学)』	6. 最初と最後の頁 281-296
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 君塚弘恭 (G. Le Bouedec et H. Kimizuka)	4. 巻 126-1
2. 論文標題 Lorient, grand port de dimension mondiale de la facade atlantique francaise (1783-1787)?	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Annales de Bretagne et des pays de l'Ouest	6. 最初と最後の頁 103-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 田和正孝	4. 巻 68巻第2号
2. 論文標題 明治期における兵庫瀬戸内の延縄漁業 『兵庫県慣行録』の記載	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『人文論究』 (関西学院大学)	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 肥後本芳男	4. 巻 41
2. 論文標題 ジャクソン期のアボリシヨニズムと印刷文化 言論・出版の自由と請願権をめぐって分裂する公共圏	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『アメリカ史研究』	6. 最初と最後の頁 4-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 田中きく代	4. 巻 67 3
2. 論文標題 北大西洋海域史から見るアボリシヨニズム研究への射程 西インドにおける奴隷解放の祝祭8月1日祭を中心に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『人文論究』 (関西学院大学)	6. 最初と最後の頁 31-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中きく代	4. 巻 35
2. 論文標題 岩崎佳孝『先住民ネーションの形成』について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アメリカ史評論	6. 最初と最後の頁 46 52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 遠藤泰生	4. 巻 22
2. 論文標題 反米：あらたな紛争の胎動か、共生の代償か (序)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ODYSSEUS (東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻1)	6. 最初と最後の頁 105-120.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤泰生	4. 巻 19
2. 論文標題 海から見るアメリカ史の可能性と課題：笠井俊和『船乗りがつかなく大西洋貿易 英領植民地ボストンの船員と貿易の社会史』(晃洋書房、2017)を読む	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アメリカ太平洋研究	6. 最初と最後の頁 87-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 遠藤泰生	4. 巻 18
2. 論文標題 諸刃の剣としての歴史認識 トランプのアメリカを問い直す	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アメリカ太平洋研究 (東京大学大学院総合文化研究科アメリカ太平洋地域研究センター. pp. . 2018.	6. 最初と最後の頁 44-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐保吉一	4. 巻 2
2. 論文標題 静岡・デンマーク牧場におけるデンマーク人農業指導者エミール・フェンガーの足跡ー青砥好夫氏へのインタビューを中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東海大学紀要文化社会学部	6. 最初と最後の頁 35-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計15件 (うち招待講演 11件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 君塚弘恭
2. 発表標題 "Coastal shipping and admiralties of French colonies in the eighteenth century"
3. 学会等名 Conference 2019 Transport, Traffic and Mobility, International Association for the History of Transport, Traffic and Mobility
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中きく代
2. 発表標題 海のリテラシー 北大西洋海域から
3. 学会等名 中・四国アメリカ学会第46回年次大会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中きく代
2. 発表標題 環大西洋世界の思想・宗教・歴史 北大西洋海域史を問う、黒人奴隷解放の祝祭を中心に
3. 学会等名 日本アメリカ学会第51回大会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 金澤周作
2. 発表標題 ロビンソン・クルーソーたちの帰還 17～19世紀における難船者の運命年
3. 学会等名 日本ジョンソン協会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 遠藤泰生 コメンテーター
2. 発表標題 “ Looking at the Present from the Past: The Transformation of Political Culture in the United States ”
3. 学会等名 アメリカ太平洋地域研究センターシンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 遠藤泰生
2. 発表標題 海・ネイション・科学 19世紀の太平洋を考える
3. 学会等名 ワークショップ.海をめぐる知識・言説・移動空間（環太平洋地域史の新展開）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 遠藤泰生 司会
2. 発表標題 2 " Transportation and Time Zones "
3. 学会等名 東京大学 文学部Pacific Gateways: International Symposium on English Literature and the Pacific Ocean, 1760-1914（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 遠藤泰生
2. 発表標題 Comment "Activism and American Society"
3. 学会等名 日本アメリカ学会第52回年次大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中野博文
2. 発表標題 アラバマ号事件再考 仲裁裁判制度の発展とアメリカ合衆国の帝国主義政策との連環
3. 学会等名 日本西洋史学会第69回年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中野博文
2. 発表標題 帝国主義と国際主義の狭間で--東部知識人が抱いた文明観の 転換（部会B「20世紀アメリカの諸思想」）
3. 学会等名 アメリカ学会第52回年次大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田和正孝
2. 発表標題 兵庫瀬戸内における漁業の維持機能 漁業者・系統団体・研究機関・行政
3. 学会等名 日本地理学会春季学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田和正孝
2. 発表標題 地域漁業学会と漁業地理学
3. 学会等名 地域漁業学会第60回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中野博文・肥後本芳男
2. 発表標題 言論空間から見るアメリカ史 奴隷制問題をめぐる印刷文化と連邦体制
3. 学会等名 日本アメリカ史学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 遠藤泰生
2. 発表標題 南北戦争の歴史と記憶 銅像は引き倒されるべきか
3. 学会等名 我孫子シルクロードサークル（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 竹中興治 Opening Remarks
2. 発表標題 Japanese Scholarship in African American Studies, 1944-2011
3. 学会等名 The University of California Education Abroad Program, Summer Session of the Workshop（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 田和正孝	4. 発行年 2019年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 288
3. 書名 石干見の文化誌	

1. 著者名 阿河雄二郎・嶋中博章（共編著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 305
3. 書名 フランス王妃列伝	

1. 著者名 君塚弘恭 玉木俊明・川分圭子編著 分担執筆	4. 発行年 2017年
2. 出版社 吉田書店	5. 総ページ数 897
3. 書名 商業と異文化の接触	

1. 著者名 君塚弘恭訳（ジェラルド・ル・ブエデク）大豆生田 稔編著 分担執筆	4. 発行年 2017年
2. 出版社 清文堂出版	5. 総ページ数 344
3. 書名 軍港都市史研究 7 国内・海外軍港編	

1. 著者名 田中きく代 阿河雄二郎 金澤周作編著	4. 発行年 2016年
2. 出版社 創元社	5. 総ページ数 320
3. 書名 海のリテラシー 北大西洋海域の「海民」の世界史	

1. 著者名 笠井俊和	4. 発行年 2017年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 330
3. 書名 『船乗りがつなぐ大西洋世界 英領植民地ポストンの船員と貿易の社会史』	

1. 著者名 阿河雄二郎 平野千果子(編)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 新しく学ぶフランス史	

1. 著者名 金澤周作	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 254
3. 書名 歴史書の愉悦	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	芝井 敬司 (Shibai Keiji) (00144311)	関西大学・文学部・教授 (34416)	
研究分担者	肥後本 芳男 (Higomoto Yoshio) (00247793)	同志社大学・グローバル地域文化学部・教授 (34310)	
研究分担者	佐保 吉一 (Saho Yoshikazu) (00265109)	東海大学・文化社会学部・教授 (32644)	
研究分担者	森永 貴子 (Morinaga Takako) (00466434)	立命館大学・文学部・教授 (34315)	
研究分担者	中野 博文 (Nakano Hirofumi) (10253030)	北九州市立大学・外国語学部・教授 (27101)	
研究分担者	田和 正孝 (Tawa Masataka) (30217210)	関西学院大学・文学部・教授 (34504)	
研究分担者	坂本 優一郎 (Sakamoto Yuichiro) (40335237)	関西学院大学・文学部・教授 (34504)	
研究分担者	竹中 興慈 (Takenaka Koji) (50145942)	東北大学・国際文化研究科・名誉教授 (11301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	遠藤 泰生 (Endo Yasuo) (50194048)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601)	
研究分担者	金澤 周作 (Kanazawa Shuusaku) (70337757)	京都大学・文学研究科・教授 (14301)	
研究分担者	君塚 弘恭 (Kimizuka Hiroyasu) (70755727)	早稲田大学・社会科学総合学術院・准教授 (32689)	
研究分担者	阿河 雄二郎 (Aga Yujiro) (80030188)	大阪大学・言語文化研究科（言語社会専攻、日本語・日本文化専攻）・名誉教授 (14401)	